ADVANCE 北海道医療大学広報誌
2020 MARCH
No.174

1日歯医者さん（歯科クリニック）の様子

先端研究推進センターの設立について

看護福祉学部 教授　小林 正伸

2020年4月1日に先端研究推進センターが立ち上がります。北海道医療大学では、開学以来、各学部において各々の専門分野での研究が続けられてきました。これらの研究活動をサポートするために、健康科学研究所が先端機器共同研究施設としての役割を担ってきました。しかしながら先端機器を集積するだけでは、日々変わりゆく最新研究の進歩に追いつくことさえ難しくなってきています。さらに、難しくなる一方の国家試験に向けた学部教育の占める割合が徐々に増加し、最先端研究を学部ごとに進めることが難しくなってきています。先端研究推進センターは、研究機器ばかりでなく研究者も1箇所に集積することで、専門分野を越えた共同研究によって最先端研究に追いつき、北海道医療大学のオリジナルな研究を確立することを目的としています。

先端研究推進センターの自然科学研究分野では、各学部の若手研究者を中心に兼担研究員として集まってもらい、各々の得意分野を活かした共同研究を行い、北海道医療大学独自のオリジナリティーの高い研究の確立をめざしています。その代表的プロジェクトの一つが、「歯周病の全身疾患の発症への関与の探索」です。がんや自己免疫疾患など多くの疾患の原因は未だ不明のままですが、日本人の多くが罹患しているとされる歯周病が、多くの疾患の原因の一つとなっている可能性を明らかにしていく、独自の仮説に基づいた研究となっています。胃がんの原因がピロリ菌であることが証明されたこと、腸内細菌が炎症性腸疾患の原因となる可能性が提唱されたことなど、体内のマイクロバイオームの新しい側面が注目されつつあります。私たちの研究が、口腔内マイクロバイオームに新たな光を当てる研究になるものと期待しています。他にも「口腔機能と認知症」、「当別の植物の健康への有用性の探索」というプロジェクトも進めていきます。

社会科学研究分野においては、世界で最初に浦河町のべてるの家で始められた「当事者研究」を、世界中に紹介して広めてこられた向谷地教授がプロジェクトリーダーとして、「当事者研究」プロジェクトを立ち上げます。「当事者研究」は、これまで向谷地教授と東京大学との共同研究として続けてこられ、世界中の研究者たちや報道機関が注目している研究です。もう一つの大きなプロジェクトは、社会福祉法人ゆうゆう等との共同研究として、「当別町の医療・福祉の向上」プロジェクトを進めていきます。また、AIを活用した教育資材・方法の開発も進めていきます。2年後をめどに実績が出るよう努力してまいりますので、ご協力・ご支援よろしくお願い申し上げます。

CONTENTS

先端研究推進センターの設立について ―― 1
新任教員・昇任教員紹介 定年退職される先生からのメッセージ ―― 2
OPEN CAMPUS 2019 開催報告 ―― 4
特別賞受賞者の紹介 就職支援イベント 災害時の歯科医療救護活動に関する協定 ―― 5
同窓会活動状況 ―― 6
OG訪問［作業療法学科］ ―― 8
あのとき。これから。医療大。 ―― 9
Society 5.0/AI時代に向けた教育支援をめざして ―― 10
アダプテッド・スポーツの普及について ―― 11
インターネットによるご寄附が可能となりました EDITOR'S NOTE ―― 12

新任教員・昇任教員紹介

新任教員

2019年9月13日付け

歯学部 助教
（口腔構造・機能発育学系〈歯科矯正学〉）

山口 優（やまぐち まさる）

北海道医療大学歯学部歯学科卒業。北海道医療大学大学院歯学研究科博士課程修了。北海道大学研修歯科医、北海道医療大学歯科クリニック臨床助手等を経て本学就任。

昇任教員

2019年10月1日付け

薬学部 准教授
（衛生薬学〈環境衛生学〉）

寺崎 将（てらさき まさる）

北海道大学水産学部水産化学科卒業。北海道大学大学院水産科学研究科生命資源科学専攻博士後期課程修了。独立行政法人食品総合研究所、国立がんセンター研究所、共和コンクリート工業株式会社海藻技術研究所、北海道大学大学院水産科学研究院等を経て本学就任。水産科学博士。

2019年11月1日付け

薬学部 助教（分子生命科学〈免疫微生物学〉）　**森 宏**（もり ひろし）

Message 定年退職される先生からのメッセージ

歯学部 教授
家子 正裕

2020年3月をもちまして定年退職することとなりました。1997年4月に歯学部内科学講座の助教授（現准教授）として採用されて以来、実に23年間本学歯学部でお世話になりました。

市立札幌病院免疫血液内科（現在は免疫内科と血液内科に分かれています）から赴任しましたが、医学から歯学に移るに当たっては、「果たして私に務まるかどうか」心配で心細かったのを思い出します。自分としては相当の覚悟で赴任しましたが、幸い前任の安河内太郎名誉教授（当時は保健管理センター教授）や歯学部の多くの先生（特に口腔外科の有末眞名誉教授、柴田考典教授）に助けられながら、何とか診療、教育、研究と徐々に軌道に乗せることができました。1999年12月に教授に昇格させていただき、多くの方々のご配慮により教室に准教授、講師の先生を迎えることができ、充実した環境で教育、研究に従事することができました。「全身疾患を理解できる歯科医師の育成」を目標として行ってきました。2005年頃から歯科医師国家試験でも内科学的な知識が重要となりましたが、本学歯学部に少しでも貢献できていたならば幸いです。

この23年間で附属病院（後にクリニック）運営、保健センター運営など様々なことに取り組む機会を与えていただきました。その貴重な経験は、今後の私の人生の糧であり指標となります。多くの教職員、学生の皆様との思い出も多く、懐かしく思い出されます。少子化に伴い教育現場も複雑で難しい世界になってきています。これからは、この新しい世界に対応できる若者の時代と思っています。彼らが活躍できる環境が整うことを心より期待しています。

人生の1/3を過ごさせていただきました本学に心より感謝するとともに、皆様方が益々ご活躍され、本学が更なる発展を遂げられることを心よりお祈り申し上げます。

歯学部 教授
坂倉 康則

本学歯学部口腔解剖学第一講座に助教授として赴任したのは1994年4月。北海道医療大学として改称した年で、歯学部の学生さんが元気よく挨拶してくれたことがとても印象的でした。在職26年間を振り返りますと、当時の教授の先生方は大変個性豊かで、近寄り難い威厳さえ感じました。赴任当時は学生数も多く、第2学年の授業のみを担当し、ゆとりのある良き時代でしたが、共用試験の導入とカリキュラム改革、歯科医師国家試験の難化と国試対策の強化、入学定員と教員の削減など赴任当時にはとても考えも及ばない歯学部の激動の時代を駆け抜けてきました。学生時代に経験した大学という最高学府での教育は系統立てられた学問へ誘うものでしたが、私学の主命であると同時に歯学教育の激変とともに、最短で資格を取得し社会に貢献すべく要約された教育へと変貌せざるを得なくなったことは大変寂しい思いすらします。解剖学という学問の論理性や人体解剖学実習での発見の素晴らしさを教授できなくなったことには悔いが残ります。しかしその一方で、人体解剖学実習や見学実習を通して、人の死に対する畏敬の念を育むことに多少なりとも貢献できたと、我ながら自負しています。解剖学教室は歯学部や他学部・附属専門学校の授業担当だけにとどまらず、献体登録者との信頼関係の構築や白菊会の運営、遺体処置と管理などの献体業務も担っています。献体業務を間違いなく遂行することを通して自己を律することが、学生の倫理教育に説得力を持つと考えてきました。その任を全うできますことに安堵しています。

本学に赴任以来、様々な職責を全うできましたことは退職された、あるいは現職の多くの先生方や職員の方のご指導ご支援に支えられたお陰です。今日を迎えることができますことは感謝の念に堪えません。今後とも歯学教育に携わりながら、多少なりとも恩返しさせていただく所存です。有り難うございました。

看護福祉学部 教授
志渡 晃一

2000年4月、北海道大学医学部公衆衛生学教室から本学看護福祉学部に助教授として赴任しました。本年3月末で定年を迎えることになりましたのでちょうど20年間勤務させていただいたことになります。これまで、多くの皆様に支えられながら無事定年まで勤めることができましたこと、心より感謝申し上げます。

振り返りますれば、当時の生命基礎講座の三宅浩次教授から推薦を受け「主に大学院の教育に期待します」とのお言葉を胸に刻み決意を新たに赴任してきたことが懐かしく、また、気恥ずかしく思い起こされます。2003年4月から大学院教授を拝命し、三宅先生の後任の西基教授のご教示を受けながら17年間「福祉疫学講座」を標榜して参りました。修士・博士課程の諸君とともに共同研究し、20余りの学位論文の完成と研究論文の発表に携わることができました。「福祉疫学講座」の使命とする「予防福祉」の推進に少しは貢献できたものと自負しています。

学部では「公衆衛生学」「社会福祉調査法」などの科目を担当し、卒業ゼミでは50名以上の学生と関わることができました。学生に対する先輩諸先生の懇切な熱い指導を横目に「大学は教育の場であって治療の場ではない」などと生意気な意見を言っていた自分が愚かで情けなく感じるようになった時、すでに相当の時間が経過していました。学生こそがキラキラと輝く宝石であり、財産でした。今改めて、恵まれた大学生活であったとしみじみとかみしめている次第です。

教職員の皆様、学外連携施設・機関関係者の皆様に支えられて、この20年間を過ごして来られたことを有り難いことと感じております。末筆ながら、皆様の今後の更なるご活躍と、本学の益々のご発展をお祈り申し上げます。長い間本当に有り難うございました。

2019年12月1日付け

リハビリテーション科学部 講師
（作業療法学科）

児玉 壮志（こだま そうし）

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科卒業。札幌医科大学大学院保健医療学研究科理学療法学・作業療法学専攻博士課程修了。北海道社会事業協会岩内病院、医療法人陽和会南山病院、財団法人紫雲会横浜病院、医療法人社団高台病院等を経て本学就任。作業療法学博士。

2020年1月1日付け

予防医療科学センター 准教授
（医学部門）

河野 豊（かわの ゆたか）

札幌医科大学医学部卒業。札幌医科大学大学院医学研究科内科系専攻内科学（第4）博士課程修了。札幌中央病院、北海道消化器科病院、札幌医科大学第4内科、米国ボストンのダナ・ファーバー癌研究所（Department of Medical Oncology）等を経て本学就任。医学博士。

2020年2月1日付け

歯学部 助教（口腔機能修復・再建学系〈歯周歯内治療学〉）　**松本 光生**（まつもと こうせい）

With heartfelt thanks.

看護福祉学部 教授
森田 勲

音別と当別での教員生活を振り返って

私が本学の教員となったのは、1978年の4月です。最初に薬学部が1974年に開設され、その4年後に歯学部が開設されたのと同じタイミングです。当時は、1991年に大学設置基準が大綱化される前で、体育実技と理論は必修科目となっていまして、歯学部の開設に合わせて増員が図られたためでした。1985年の9月に当別に移転するまで、7年間を音別の教養部で過ごしました。音別キャンパスは国道38号線を挟んで校舎と寮や教職員の住居などがあり、音別町と白糠町の間に突然と現れるコミュニティーで教員生活を送りました。

学生も教員も、通称「大学村」での授業と生活の繰り返しで、欠席回数が多くなった学生は寮に迎えに行ったり、買い物を頼まれたりで、公私にわたった付き合いが続きました。したがって、今とは違って学生全員の名前を覚えていましたし、あまりやることもないので、バスケットボールを中心としたクラブ活動を随分行いました。ほとんどの教員が動けましたので、無謀にも硬式野球部やサッカー部などとのゲームも幾度となく行いました。冬には学生と一緒にそりすべりやスケート、敷地内にあった人造湖でワカサギ釣りを行うなど懐かしい限りです。

当別に移転してからの最初の11年間は、授業や体育関係の施設の構築に追われたことに加え、専門課程の楔形カリキュラムが展開されることになり、教養部、基礎教育部と組織の名称が変更する中で本学における教養教育の意義が問われるタイミングでもありました。1993年には看護福祉学部が新設され、2000年以降は教養教育担当の教員が各学部に分属・併任することになりました。私は看護福祉学部への配属が決まり現在に至っています。この間、ほぼ学生委員としてかかわり、2008年から8年間は学生部長として、学生生活を円滑に過ごすための指導や助言などの協力をさせていただきました。このほか、体育関係の施設管理責任者や全学教育推進センター長としての4年間など、多くの教職員の皆さんに支えられてなんとか職務を全うさせていただきました。最後に事務局をはじめ卒業生や現役学生の皆さん、施設・清掃関係の皆さんなど本学関係者の方々に感謝を申し上げ、メッセージとします。

リハビリテーション科学部
教授
青木 光広

60歳で北海道医療大学に赴任して

早いもので、2015年4月に北海道医療大学リハビリテーション科学部に赴任してから5年が経過し、2019年5月で65歳となりました。理学・作業療法士の学部教育に如何に前向きに取り組むかについて、現職のリハビリテーション科学部教授や学部長と議論を重ね、講師や助教と協力して自分なりに教育の理想像を描きつつ実践しようと試みて参りました。まだまだ道半ばで、担当する講義を一日に2講続けて行う体力が減っているこの頃の自分に気が付き始めています。また、理学・作業療法学科に2名在籍していた医師が1名退職し、現在は私1名のみですので極めてさみしい思いがいたします。近年、リハビリテーション科学部に改組された言語聴覚療法学科には数名医師が在籍しますが、physicalな教育を担当するという観点から、多少趣の異なった仲間と感じています。1年次の医学概論、2年次の整形外科学、3年次の画像診断学は理学・作業療法共通科目、3・4年次の理学療法ゼミナールを2名から7名を担当し、また、大学院生を現時点で5名抱えて土曜日曜にかかわらず、彼らと実験をともにして論文執筆に携わってきました。特に大学院生の研究計画や論文執筆では、添削はネットでの添付書類の行き来で行い、例えば夜9時に院生から送られてきた論文原稿はその日のうちに添削して朝1～3時までに送り返します。大学院生を休ませないで継続して論文執筆に専念させるこの力技を、1名ではなく常に数名に対して駆使してこれまでやってきました。忙しいのですが、相当に充実した教育人生であったと振り返っています。おかげさまをもちまして、このような教育を経験した卒業生は、同じことを部下に試みているようです。

最初からはこれほど多くかかわることを予定していなかったのですが、北海道医療大学病院での整形外科外来診療とリハビリテーション室の運営も、赴任1年目から始めていました。赴任後2年目で理学療法士が1名、3年目2名、4年目で3名就業となり、順調な運営が行われ、安堵しています。整形外科年間収益はリハビリテーションも含め年間3,000万円から4,000万円、5,000万円、6,000万円、現在は7,000万円と右肩上がりで増加しています。来年は8,000万円の収益を予測していますが、私の体力がそろそろ頭打ちになってきていますので、どこまで続くか分かりません。

今のところ、外見も60歳前に見えるようですし、生活習慣病はありますが、頸動脈と腹部エコー、心電図は正常で悪性腫瘍、糖尿病、動脈硬化もなく気力もまだ維持されています。医師会等では社会医療に関する役職も担い、社会保険審査会診療報酬支払基金審査委員、札幌市医師会医事紛争処理委員会委員、北海道立心身障害者総合相談所補装具判定員などを任されて、時間外を相当量消費している事態になっています。働き方改革とは全く逆の方向にすすんでいますが、本学大学院生が開いてくれる懇親会や学部生との懇親会、同窓会セミナーでの会合、少年野球肘検診の開催など、さらに前任地であった札幌医科大学保健医療学部での大学院生や学部生とのディスカッション、メディカルスタッフ解剖セミナーでの懇親、北海道理学療法士会講習講師など、リハビリテーション領域でお座敷がかかりますので自分としては満足しています。予定している2年間の特任教授在籍で在学中の担当大学院生を卒業させて、今後のことを見据えていこうと考えています。毎日早起きして出勤し、教務や実験や研修会と言って土日祝日も朝から出ていく儘な私を支えてくれている妻や子供たち、あるいは大学院生、学部事務員や教員、病院職員の方々にこの場を借りて感謝の気持ちを述べたいと思います。心よりありがとうございますと申し上げます。

OPEN CAMPUS 2019 開催報告

2019年のオープンキャンパスは、6月16日（日）、8月3日（土）・4日（日）、9月21日（土）の全4回（歯衛は5月11日（土）を含めて全5回）開催し、合計2,831名（生徒内数1,785名）の方に参加いただきました。当日は、大学や入試の概要説明のほか、学部学科ごとのプログラムに分かれて在学生によるライブトークや体験実習を行いました。

※以下は、各学科で実施した体験実習の一部です。

薬学部 薬学科

在学生が使う実習室でビタミンを検出してみよう!

栄養ドリンクに入っているのは、どんなビタミン?ある化学反応を使うと、ビタミンに色がつき"見る"ことができます。在学生が実際に行う実験で、薬学のおもしろさを体験しよう!

歯学部 歯学科

先輩たちと一緒に歯科の現場を楽しく体験！

キャンパス内にある「歯科クリニック」の見学からむし歯削りや3Dプリンターの体験実習まで、在学生がご案内します。勉強や学生生活のこと、なんでも質問OK!

看護福祉学部 看護学科

新生児の抱っこのコツを在学生が楽しく教えます!

グループに分かれて、新生児の抱っこ、血圧と脈拍の測定、心臓マッサージなど看護師のワザを体験!1人で参加しても、先輩が明るく楽しくフォローします。

看護福祉学部 臨床福祉学科

「気持ち」を聞く話し方を体験してみよう!

声のトーンや表情から話し相手の「気持ち」を探る、ソーシャルワーカーの面談術を少しだけ伝授。在学生とペアになって、実際にやってみよう!

心理科学部 臨床心理学科

憧れの心理学の入り口を覗いてみよう！

たとえば子どもの発達支援のために、心理学ができることって?心理士やスクールカウンセラーの経験も豊富な先生が、その仕事内容をわかりやすく教えます。

リハビリテーション科学部 理学療法学科

最先端の医療機器で自分の身体を測定しよう!

理学療法士の専門機器は、筋肉の俊敏性や持久力から、体内に取り入れる酸素量まで測定することができます。友だちと比べてみるなど、楽しく体験してください!

リハビリテーション科学部 作業療法学科

"感覚"から考える。多彩な作業療法を体験！

病院や福祉施設などで行われている作業療法をご紹介。楽しく体験しながら、そのような作業療法を行う理由や意義など、プロならではの視点も教えます!

リハビリテーション科学部 言語聴覚療法学科

最新テクノロジーで「声」のフシギに迫る！

言語聴覚士は、「話す」「聞く」などの機能回復を支援するリハビリテーション専門職。聴力検査のほか、音響分析や舌の筋力の測定などいろいろ体験できます。

医療技術学部 臨床検査学科

顕微鏡で細胞を観察してみよう！

患者さんの血液や組織から病気の原因を見つけ出す、臨床検査技師の仕事を体験! 顕微鏡を使って血液中の細胞を観察します。

歯学部附属歯科衛生士専門学校 歯科衛生科

「超音波スケーラー」で歯石取りにチャレンジ！

実習室には、本格的な歯科ユニットがずらり。超音波スケーラーという器具を使った歯石取りや、歯型の取り方などを、先輩たちと先生がやさしく楽しく教えます!

参加者アンケート結果

すべてのオープンキャンパスにおいて、参加者アンケートを実施しました。

Q. 本学（校）のどういうところに魅力を感じましたか?（複数回答）

1位 医療系総合大学である 62.9%

- 2位 資格取得（国家試験合格率）…… 44.5%
- 3位 カリキュラム・授業内容…… 37.9%
- 4位 最新の実習設備が完備…… 28.5%
- 5位 大学病院等の医療機関がある…… 19.9%

Q. オープンキャンパスの満足度は?

94.8%

94.8%の方が満足・少し満足と回答

参加者の感想

- 大学祭と同じ日での実施だったため、学校の雰囲気が分かりやすかった。
- 最初は少し緊張していたが、ライブトークや昼食を過ごしてたくさん笑えて、楽しかった。
- 在学生ライブトークでは、学生さんが学生生活で感じていることを直接聞くことができ、魅力がすごく伝わった。
- 在学生がとても親身だったので、不安がなくなった。ますます勉強を頑張ろうという気持ちになった。
- 在学生がとても話しやすく、分かりやすく説明をしてくださったので、とても楽しい時間を過ごせた。
- 教員と学生の距離が近くて良い。
- 医療系の学部が多くあるのも、すごくメリットがあることが分かった。
- 学生がとても楽しそう。学年を越えて仲が良い様子が見られた。
- 建物が新しいだけでなく、隅々まで清潔で、学ぶ意欲が向上する環境だと感じた。
- 学生が孤立することなく学べると思った。個別の学習指導があることは安心。大学でも担任がいることが安心。
- 教員の熱意が感じられてとても良かった。
- 交通機関が気になっていたが、利用しやすいことが分かった。

OPEN CAMPUS 特設サイトを開設しました!

体験授業や在学生との交流など、
＼ オープンキャンパスの様子をご覧いただけます。 ／

https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~koho/opencampus/

特別賞 受賞者をご紹介します。

安倍賞 芸術文化活動または社会貢献活動において顕著な活躍をした個人・団体を表彰
堂垣内賞 スポーツ活動において顕著な活躍をした個人・団体を表彰

安倍賞

山下絵利子、江端一馬、鈴木圭乙里、巣山航（平成30年度研究チーム）

■受賞理由
公益社団法人日本歯科医師会主催平成30年度スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会において準優勝・臨床部門第1位受賞

堂垣内賞

ゴルフ部（歯学部）

■受賞理由
第51回全日本歯科学生総合体育大会において男子団体の部優勝

本学では就職支援イベント「就職相談会」を開催しています。

病院や薬局、社会福祉施設、企業など様々な法人の採用担当者が本学の学生のためにブースを出展し、仕事内容の説明や自社のPRなどを行います。

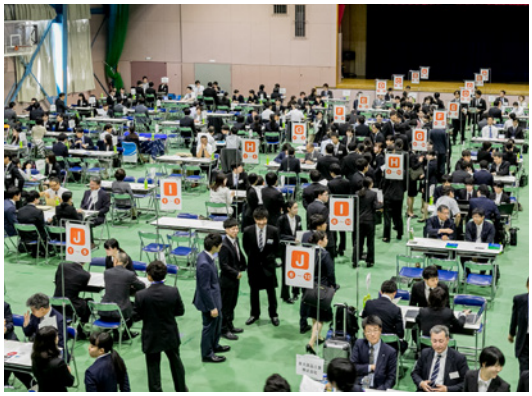
2019年度は薬学部、看護福祉学部（臨床福祉学科）、リハビリテーション科学部、歯学部附属歯科衛生士専門学校にて開催され、延べ403団体に参加いただきました。なかには現在活躍中の本学卒業生が就職先の病院・施設職員としてこのイベントに参加している法人もあり、就職活動中の在学生にとっては先輩との貴重な交流の場にもなりました。なかでも昨年7月に看護福祉学部で開催した就職相談会は、タイトルを「福祉キャリアフェスタ」と銘打ち、新たなイベントの仕様としてポスターセッション形式を導入しました。会場には各団体の趣向を凝らしたPRポスターが並び、参加した学生は病院ブースを積極的に訪問し、真剣な表情で説明を受けるなど、最後まで大きな賑わいをみせていました。

本学では各学部に就職委員会を設置し、就職ガイダンスや専門講師を招いての各種セミナーを数多く実施しています。また、教員や就職相談室のキャリアアドバイザーを中心に応募書類の添削や面接練習等、個別な相談にも対応しており、教職員が一丸となってきめ細やかな指導をしています。

本学各学部・学科に関わる求人のお申し込み、就職に関するお問い合わせ等につきましては、学務部学生支援課までご連絡願います。

[参加団体]403団体 ●病院 ●施設 ●公務 ほか

就職関連ホームページ http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~syusyoku/index.html



災害時の歯科医療救護活動に関する協定の締結について

2020年2月14日付けにて、一般社団法人北海道歯科医師会と、災害時における歯科医療救護活動に関する協定を締結しました。これにより、北海道内で大規模災害が発生し、北海道地域防災計画に基づく歯科医療救護活動の依頼があった場合には、迅速に歯科医師・歯科衛生士が派遣され、地域住民に対する救護活動が遅滞なく効率的に行われることになります。

2018年9月に発生した北海道胆振東部地震時のミーティングの様子

薬学部
同窓会長
桂　正俊

薬学部

〈創立年:1979年　会員数:約5,097名〉

薬学部同窓会は全国17支部（道内7、道外10）で活動を行っています。近年は会員数の増加に伴い、道内支部の細分化の動きが出ています。また、道外では逆に卒業生が減少していることから、本州支部の統合やブロック化も含めて考えていかなければなりません。各支部活動としては、多くの支部では、医療薬学セミナーと同時に支部総会や懇親会を開催し、その地域での薬業や医療に関する情報交換を行っているところです。最近では歯学部や他学部の同窓会とも連携したセミナーの開催が行われている支部もあり、学部の枠を越えた活動が始められています。同窓会の活動はこのように会員同士の交流を深めながら、それぞれの仕事やモチベーションを高めることをひとつの目標としていますので、全国の同窓生が一様に参画できるよう支部役員の協力を得ながら活性化を図ってまいりたいと考えています。また、在学生も同窓会準会員としていますので、入学時に行われる新入生オリエンテーションにも同窓会として参加し、卒業生の講演や新入生の交流が深まるようゲーム大会等を開催しています。さらに、卒業生の生涯教育として、医療薬学セミナーや将来ビジョン講座など卒後研修を企画するとともに「卒業生・在学生合同懇談会」を開催しており、我々同窓会としても、入学時から学生に対しての支援活動を通して、大学に寄与できるよう努力してまいりたいと考えています。

■http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~phalumni/

歯学部
同窓会長
蓑輪　隆宏

歯学部

〈創立年:1984年　会員数:約3,236名〉

平素は歯学部同窓会活動に際し、深いご理解と多大なるご協力、誠にありがとうございます。お陰様で歯学部は本年度、36期生の後輩たちを世に送り出し、42期生（準会員）を新たに迎えることができました。これもひとえに関係各位の皆様の多大なるお力添えによるものと心から感謝しお礼申し上げます。会員の福祉と親睦、学部の発展に寄与することを目的に「昭和」の時代に設立された本会も「平成」を駆け抜け、新たな時代「令和」を迎えることができました。この間、世の中の価値観は時代とともに大きく変わりましたが、歯科医療の現場でもそれは同じで患者さんやそこで働く人の考え方や望みも変化しました。

また、未来の歯科界を担う人財を輩出する大学は人口減少に加えて歯科医師国家試験の難化により、選ぶ立場から完全に選ばれる立場に変わりました。そんな激しい状況のなか、我が歯学部も選ばれる学部になるため、学内外皆で試行錯誤しながら一生懸命頑張っているところです。本会はこの高いハードルを乗り越えるため、学内の皆様と協議しながら色々なお手伝いをして参りました。その一部を紹介しますと学部の発展に関しては準会員である生の応援活動として新入生オリエンテーションの協力、OBによる応援講義、OBによる学外実習の受入れ、国家試験の応援、謝恩会の応援、同窓会賞の授与、加えて本会設立30周年の際、多くの会員の皆様から頂いた浄財を元に設立された歯学部未来基金を使っての学生の海外研修の渡航費用の一部援助や入学間もない1年生の夏期補習の実施など、可愛い後輩たちの進む道の足元を少しでも照らすことができたらと思いやっています。

また、福祉の部分では残念ながら毎年のように発生する災害で不幸にも被害に遭った会員の先生へ、仲間から募った義援金をお渡しし、少しでも何かの足しにして貰うこと、また、親睦に関しては全国各地で開催される歯科臨床セミナーの開催や学術講演会後に開かれる懇親会やクラス会です。最近は親子二代で参加される会員もおられる光景を見て、歴史が積み重ねれてきたことを実感しています。いずれにせよ今後さらに続く人口減少時代ですが、歯学部同窓会に留まらず全学の同窓会が一致団結して母校を支えていかなければならないと考えています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

■http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~d-alumni/
■dousoukai-honbu@clock.ocn.ne.jp
■事務局 札幌市北区北6条西6丁目2-11 第3山崎ビル4F
TEL 011-299-9069　FAX 011-299-9609

看護学科
同窓会長
川村　武昭

看護福祉学部／看護学科・札幌医療福祉専門学校／看護学科

〈創立年:1997年　会員数:約2,000名〉

福慧会（看護学科同窓会）は1997年に創立し、今年で活動24年目となりました。日頃からご尽力をいただいています同窓生の皆様をはじめ、各同窓会の皆様、そして大学関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

さて、福慧会の主な活動内容としましては、臨床福祉学科同窓会（福祉・介護同窓会）と協働での看護福祉学部同窓会セミナーの開催と看護福祉学部学会の企画及び運営を主軸に、歯学部をはじめとした4学部と歯学部附属歯科衛生士専門学校とともに同窓会コラボ☆講演会を開催しています。また、これらの活動状況や各地で活躍する同窓生の近況報告等を会報誌（Fukuekai）やホームページを通して発信するとともに、同窓生同士の繋がりを保つことを目的に会員名簿の管理を行っています。また、これら同窓会活動の検討のため、現在15名の同窓生で構成される同窓会理事会を年3回程度開催しています。

今年度は、取り組み2年目となるオープンキャンパスへの従事に力を入れて参りました。看護師、保健師、助産師等の看護職を志そうとする高校生やその親御さんとの真剣かつざっくばらんな懇談をとおして、本学の卒業生として、また、看護職の一人として役立てることがあることに誇りを感じるとともに、これまで培ってきた経験や知見が参加者の不安や悩みの軽減につながることを強く願うところです。また、この取り組みがゆくゆくは母校の益々の発展に寄与されることを期待しています。

今後、福慧会としましては、大学及び他学部の同窓会との連携を図りつつ、卒業生及び在学生との繋がりの構築をめざし活動して参りたいと考えています。社会人となってからは職場の同僚との繋がりが増えていきますが、行き詰まりを感じたときに頭に浮かぶのは本学でともに試練を乗り越えてきた仲間のことではないかと思います。私たち福慧会では、同窓会セミナーや各種講演会の開催、クラス会の開催助成等を通して、同窓生が気軽に集まれるきっかけづくりを行っていきたいと考えております。同窓生が集い、安心して語り合える機会が増えることにより、看護職として、また、本学の同窓生としての繋がりを再認識し、本学の同窓生としての交流が増えることが会の発展につながると考えています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

■http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~kango/
■kango@hoku-iryo-u.ac.jp

臨床福祉学科
同窓会長
小畑　友希

看護福祉学部／臨床福祉学科・札幌医療福祉専門学校／介護福祉学科

〈創立年:2000年　会員数:約2,052名〉

臨床福祉同窓会は今年で設立から20年の節目を迎えます。これまで多くの関係者の皆様にお世話になったことをあらためて感謝申し上げます。同窓会活動としては、一昨年の北海道胆振東部地震をはじめ災害はいつどこで起きてもおかしくない時代となったこともあり、昨年5月の同窓会セミナーは災害をテーマにしました。災害では高齢者や障害者は2倍の死亡率と言われています。防災減災を心がけ、私たち福祉で対象となる人の力に少しでもなれればと思います。一方、福祉や介護の仕事をめざす人が少なくなってきている現実もあります。そんな中で、10月には大学の先生や学生さんとともに同窓会も協力したかたちで、「病院で働く相談のおしごと体験講座」が、中高生を対象に北海道医療大学病院で開催されました。医療ソーシャルワーカーって何?ってことを知ってもらうことから福祉の人材をつくっていくことにつながります。このような企画運営は今後も大切にしていきたいと思います。また、他学部との連携事業であるコラボ☆講演会にも継続して関わることができました。

歴史があり道内で最も規模の大きい医療系総合大学である北海道医療大学に、臨床福祉学科が位置づけされていて、その卒業生の一員であることに誇りを持って志高く、今後も歩んでいければと思います。どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~fukudo/
■fukudo@hoku-iryo-u.ac.jp

臨床心理学科
同窓会長
上河邉　力

心理科学部／臨床心理学科

〈創立年:2006年　会員数:約620名〉

平素より同窓会活動への格別のご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。昨年度同様、本年度も2回の同窓会セミナーを開催し、多くの在学生や卒業生の皆様方にご参加いただきました。昨今はお子さんとその保護者に対する支援のニーズが非常に高まっています。しかし、それを支援する資源が不足しており、公認心理師をはじめとする専門職の活躍が求められています。そこで、当同窓会としても子どもと保護者の支援に焦点を当てたセミナーを積極的に開催しています。本年度は、1回目のセミナーでは“アナログゲームをお子さんの療育に活かす方法”をテーマとし、2回目のセミナーでは“虐待を予防するために必要な知識”をテーマとしました。来年度は、“心理学を活かしたお子さんの褒め方、励まし方”をテーマとした研修が企画されています。これらのセミナーを通して、社会のニーズに応え、社会から必要とされる心の専門家を育てていくことに力を注いでいきたいと考えています。

また、本年度は心理職初の国家資格である公認心理師の有資格者が誕生した年でした。臨床心理学科の多くの卒業生も一昨年に国家試験を受験し、晴れて公認心理師として活躍しています。国家資格保持者としての心理職に対する社会の期待も高まっています。当同窓会では、そうした期待やニーズを敏感に察知することに努め、会員の皆様方に同窓会活動を通してフィードバックできる体制を整えていきます。これからも当同窓会は、時代や環境の変化に合わせた同窓会運営を行って参る所存ですので、変わらぬご支援を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

■http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~p.dousou/ ■shinri-dousoukai@hotmail.co.jp

理学療法学科
同窓会長
武田　智洋

リハビリテーション科学部／理学療法学科

〈創立年:2017年　会員数:約200名〉

理学療法学科が開設されてから7年、今年は第4期生が社会人デビューを果たします。それと同時に当同窓会も4年目を迎えます。発足時から変わらずご指導いただいている泉唯史学部長、顧問の高橋尚明教授、また、あいの里ST会の先生方には企画・運営など多大なご支援ご協力をいただいています。あらためて御礼申し上げます。

今年もまた「北海道医療大学」から新たに「理学療法士」が誕生することを嬉しく思います。これまでの卒業生は北海道内のみならず、全国各地の医療機関や福祉施設等で幅広く活躍しています。これは非常に心強いことです。第4期生の皆さん、初めての仕事で慣れないことや悩むことが多くあるかと思います。そのような時は身近な卒業生に声をかけ、些細なことでも相談してみてください。同窓会としても全面的にサポートできるような環境や場を作っていきたいと思います。また、卒後教育の一環として、当学科教授を招いての同窓生向けセミナーを今年も企画しています。知識・経験が豊富な先生による講演、学生時代お世話になっていた先生にだからこそできる相談や質問など、一専門家として成長できるきっかけとなればと思っています。今後も後援会の皆様をはじめ、各同窓会の先生にご指導いただきながら、本学の発展、同窓生の更なる活躍の一助となるべく活動をして参りたいと思います。

■http://iryoudaipt.web.fc2.com/ ■iryoudaipt@gmail.com

作業療法学科
同窓会長
田丸　仁啓

リハビリテーション科学部／作業療法学科

〈創立年:2017年　会員数:約110名〉

設立から3年が経過し、少しずつ同窓会活動にも慣れてきたところであります。例年あいの里ST会の石黒会長をはじめ各先生方には多大なるご支援ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。今年度は第3期卒業生の入会、総会の開催、 毎月の理学療法学科同窓会・あいの里ST会との合同役員会の出席を主に活動して参りました。また、2度の会報発行を通じて会員へのセミナー開催報告等を行いました。

現在、約110名で活動していますが、新入会員は毎年30～40名とまだまだ少ない会員数の期間が続きます。少人数という特徴を活かして密に連携を取りながら、当会が同窓生、在学教員、在学生の繋がる場としてあり続け、発展していくことを願っています。

今年度の集大成として3月21日(土)に札幌サテライトキャンパスにて、以前本学で講師をされていました北海道大学の澤村大輔先生を講師にお招きし、第2回作業療法学科同窓会セミナーを開催します。社会人、臨床家として学生時代とは違う、成長した視点でご参加くださることを願っています。また、来年度においても積極的にセミナーを開催し、同窓生の皆様へ還元できるよう役員一同努力して参りたいと考えています。

最後に北海道医療大学後援会の皆様、各同窓会役員の皆様のご理解、ご協力の下に、当会の運営が成り立っていますことに深く御礼申し上げます。

■hokuiryodai.ot@gmail.com

言語聴覚療法学科
同窓会長
石黒　恵美子

心理科学部／言語聴覚療法学科・札幌医療福祉専門学校／言語聴覚療法学科・言語聴覚療法専攻学科

〈創立年:1994年　会員数:約1,200名〉

当会は札幌医療福祉専門学校の言語聴覚療法学科の第1期卒業生により設立されました。講演会の企画・運営と年に2回の会報発行を通して現役生・卒業生の皆様への情報提供を中心に活動しています。今年度は、6月29日(土)に総会と言語聴覚療法学科同窓会セミナーを開催しました。高倉祐樹先生を講師にお招きし「日常臨床で実践できる!研究法の基礎ー失語症の事例を中心にー」をテーマに、貴重なお話をうかがいました。

現在は3月14日(土)第13弾コラボ☆講演会、6月の同窓会セミナー(専門職向け)の開催に向け準備を進めています。ぜひ多くの皆様にご参加いただきたいと存じます。最後に、この場をお借りし北海道医療大学後援会の皆様・内外の先生方のご理解・ご協力を賜り、滞りなく当会の運営を行えていますことに、深く御礼申し上げます。

今後も同窓会活動を通じて皆様のお役に立てるよう、役員一同努力して参ります。

■st-kai@hoku-iryo-u.ac.jp

北海道医療大学同窓会支部等連絡先

■薬学部

支部名	支部長(期)	連絡先
札幌支部	多田　正人(4)	☎011-812-2311
道北支部	沼野　達行(10)	☎0166-32-8181
十勝支部	石原　敦(3)	☎0155-28-3344
道南支部	吉田　元(12)	☎0138-27-7727
釧根支部	羽田野　貴志(11)	☎0154-32-1337
オホーツク支部	新井　俊(10)	☎0157-31-3310
日胆支部	山田　達生(2)	☎0142-76-5258
青森支部	三上　章(1)	☎017-729-0330
栃木支部	橋本　秀雄(3)	☎0285-54-5080
茨城支部	西野　郁郎(1)	☎0293-42-0239
北越支部	本間　信哉(3)	☎0254-26-7676
神奈川県支部	川田　哲(3)	☎045-742-2301
東海支部	高尾　信彦(2)	☎053-451-0821
関西支部	山口　和俊(9)	☎0721-28-6261
中四国支部	勝原　聡(3)	☎082-291-2104
九州支部	山田　昌人(3)	☎0965-52-5750
沖縄支部	村田　成夫(4)	☎098-956-1093

■歯学部

支部名	支部長(期)	連絡先
北海道支部連合会	佐藤　明理(4)	医療法人社団明雄会そのまち歯科 ☎011-387-8811
青森県支部	佐藤　孝治(2)	佐藤歯科医院 ☎0172-36-0412
秋田県支部	石川　承平(14)	いしかわ歯科・矯正歯科 018-887-3988
岩手県支部	高野　玄(18)	高野歯科クリニック ☎0197-23-2488
宮城県支部	郷家　道彦(10)	郷家第二歯科医院 ☎022-223-3306
山形県支部	芳賀　俊和(5)	芳賀歯科医院 ☎0238-84-8107
福島県支部	外島　昭夫(7)	ホワイト歯科医院 ☎024-875-3232
茨城県支部	秦　博文(2)	社会医療法人愛宣会ひたち医療センター歯科 ☎0294-37-0713
栃木県支部	松井　章(2)	松井歯科医院 ☎028-656-4618
群馬県支部	篠崎　広治(1)	しのざき歯科医院 ☎0276-48-0118
埼玉県支部	青木　聡(7)	あおき歯科医院 ☎049-256-2220
千葉県支部	寺山　功(4)	葉山歯科医院 ☎0471-64-6480
東京都支部	蛯名　勝之(5)	エビナ歯科医院 ☎03-3200-4818
神奈川県支部	阿部　智彦(2)	阿部歯科医院 ☎045-953-7676
山梨県支部	安田　伸一(13)	やすだデンタルクリニック ☎055-243-8461
長野県支部	小池　文一(2)	小池歯科医院 ☎026-224-1482
新潟県支部	山下　克弥(9)	わかば歯科医院 ☎0258-83-1010
富山県支部	藤川　晃(5)	藤川歯科医院 ☎0764-83-2231
石川県支部	久保　伸一郎(2)	粟津歯科医院 ☎0761-44-4852
愛知県支部	木村　英雄(1)	このめ歯科医院 ☎052-451-1182
京都府支部	堀内　光一(10) ※支部長代理	堀内歯科医院 ☎0774-21-4016
大阪府支部	西　一幸(1)	西歯科医院 ☎06-6793-7500
広島県支部	神原　滋(6)	明王台クリニック ☎084-952-2281
四国支部	谷本　良司(3)	医療法人谷本歯科医院 ☎0883-42-2069
九州支部	清川　宗克(3)	清川歯科・口腔外科クリニック ☎092-822-8805
沖縄県支部	玉城　均(1)	ながた歯科医院 ☎098-854-1182

■看護福祉学部

☎0133-23-1211

○**看護学科**(内線:3641)担当:明野(実践基礎看護学講座)

○**臨床福祉学科**(内線:3708)担当:池森(介護福祉学講座)

■心理科学部・リハビリテーション科学部

☎0133-23-1211

(学務部 心理科学課・リハビリテーション科学課)

○**臨床心理学科**　○**作業療法学科**

○**理学療法学科**　○**言語聴覚療法学科**

歯科衛生士専門学校
同窓会長
梶　美奈子

歯学部附属歯科衛生士専門学校

〈創立年:1991年　正会員数:約1,236名、準会員:31名〉

本会の目的は、1.本校で学んだ高い理念と教養を保つ。2.自主協調の精神に基づき広く社会に貢献する。3.本校の発展に寄与し、併せて学術研究の向上に努める。と会則に記されています。1991年の発足以降、前述の目的に沿って、あるいは、目的自体を目標にして運営を行ってまいりました。会員数が1,200名を超え、たくさんの卒業生が臨床、教育、公的機関などあらゆる場面で活躍しています。たくさんの同窓生と学会や講習会でお会いして皆様が高い意識を持って日々患者さんやクライアントに接していることがわかります。また、国内外の学会等で表彰を受けている同窓生の噂もちらほらと耳にします。同じ歯科衛生士として、そして、同窓生として大変嬉しく思います。同窓生の皆様は、本校で学んだという基盤を利点に各部門で活躍されているのだと実感しています。そんな同窓生たちに恥じぬように、同窓会はしっかりと歩みを進め、既卒者のみならず在校生についても学校と協力して支援を継続しなければならないと考えています。

同窓会の行事はさまざまですが、年に2回講演会を行っています。一つは、同窓会独自で行うセミナーで毎年役員が講師の選択に頭を悩ませていますが、歯科に限らず、コミュニケーションに関する事、メンタルトレーニングに関する事を講演いただくなど趣向を凝らし、在校生や一般の方まで多くの方々にご参加いただいています。もう一つは、他の学部と一緒に連携してコラボ講演会を行い、口腔から全身の健康、食べることなどについて学びます。同窓会のあり方として、会員のみならず在校生もサポートしていかなくてはなりませんが、会自体が学校と連携し、ともに成長して行くことで会員、在校生にとって意味のある会となるように努力してまいります。

■http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~katakuri/
■okahashi@hoku-iryo-u.ac.jp

歯学部附属歯科衛生士専門学校同窓会支部連絡先　北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校　☎0133-23-1211(内線:3482)担当:大山・岡橋

卒業生を対象とした各セミナー・公開講座に関するお問い合わせ先　学術交流推進部 地域連携課　☎0133-23-1129(直通)　E-mail:nice@hoku-iryo-u.ac.jp

リハビリテーション科学部
作業療法学科 編

OG訪問

つられて、ついこちらもほほ笑んでしまう素敵な笑顔で迎えてくれた若松さん。希望していた訪問リハビリテーションで、利用者さん、家族との一体感ある作業療法を実践しています。

イムス札幌内科リハビリテーション病院
訪問リハビリテーション 作業療法士
若松 來夢さん（リハビリテーション科学部作業療法学科2018年3月卒業）

訪問OTの一日

若松さんの勤務先は本学在学中に9週間の臨床実習を行った病院です。実習中、地域とのつながりの強さに引かれ、「自分のやりたいことが見えてきた」と、迷わず就職の第一志望にしたといいます。1年目は入院患者さんを担当、2年目には強く希望していた訪問リハビリテーション所属となりました。

若松さんの1日は早くに始まります。7時40分頃には出勤し、8時半からのミーティングまでをカルテの確認や論文を読む時間に充てます。9時には車で利用者さん宅へ出発。最大で午前3軒、午後3軒を訪問し、17時頃から記録の整理などデスクワーク、この時間にケーススタディ（事例研究）が行われることもあります。訪問は利用者さんごとに週1～2回、各40分か60分のサイクルです。

同院の訪問リハビリテーションは、作業療法士3人、理学療法士4人、言語聴覚士1人の計8人で札幌市手稲区と西区の一部、小樽市の一部を担当。

例えば洗濯物を干す動作では、何が困難かに合わせて、裏返しにしない、干す前に靴下の左右を揃えるなど工夫します。

生活の中に入って

作業療法士は家事や入浴、着替えなど日常生活の動作を促し、同時に精神面でもサポートする、守備範囲が非常に広い職種です。若松さんも「すべての学問は作業療法に通じる」という本学の授業で聞いた言葉を胸に、様々な職種と連携しながら「作業につながることなら何でもします」といいます。

車椅子で外出を楽しんでいた脳性まひの方が感染症で入院、上体を起こすと血圧が急激に下がるため寝たきりの状態で退院したケースがありました。担当になった若松さんは、医師による投薬の効果を見ながら、車椅子用に用意した大小様々なクッションの数や置き方を調整、無理のない座位の角度を探り、利用者さんは車椅子に戻ることができました。上体を起こすと、寝た姿勢とは視野も全く異なり、QOL（生活の質）は格段に上がります。

呼吸障害があり、歩行も不自由、うつうつとした日を過ごしていた別の利用者さんは、近所に住む娘さんを訪ねたいものの、娘さん宅入り口の10段の階段が障害になって諦めていました。若松さんは利用者さんと一緒に現場に行き、訓練法を考え、娘さんに介助法を指導、訪問リハビリテーションのない日でも父娘2人でできる訓練を提案しました。“自主トレ”は実を結び、10段の壁を克服した利用者さんはすっかり明るくなったといいます。

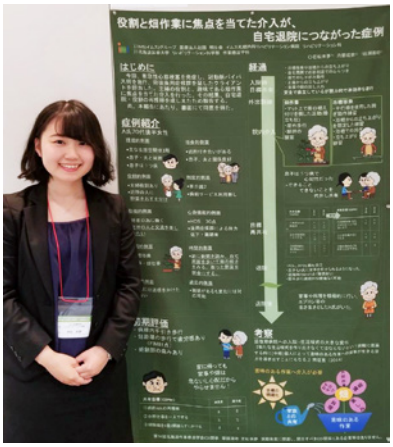
よりよく生きるために

若松さんの上司は「生きるために医学があり、よりよく生きるために作業療法がある」と言ったそうです。リハビリテーションの目標を達成して訪問リハビリテーションから卒業する利用者さんがいる一方、終末期の利用者さんと家族の「最期まで家で」という気持ちをサポートする場合もあります。どちらの場合も利用者さんが「よりよく生きる」ため、生活の場で、生活

在学中は大学祭の実行委員。「ハプニングやトラブルもありましたが、臨機応変な対応、準備の重要性など多くを学びました」（若松さん）。訪問リハビリテーションの初日、人工呼吸器を使う利用者さん宅で落雷による停電に遭っても落ち着いて行動できた強さはここで培われたのかもしれません。

に即した介入ができるいまの仕事に、若松さんは大きなやりがいを感じるといいます。そしてもっと利用者さんの力になりたいと、MTDLP（生活行為向上マネジメント）実践者研修を修了、また、国際的に標準化された評価法AMPSの認定評価者も取得しました。数年先には認定作業療法士の資格取得、大学院入学も視野に入れているといいます。やりがいを個人のものにとどめず、作業療法の発展に生かしていくことも考えているようです。

アグレッシブな若松さんですが、忙しくて自分の時間がないのでは?と聞くと、「これが趣味のようなものですから」と、一際すがすがしい笑顔で答えてくれました。



2019年6月、北海道作業療法学会でポスター発表。同年9月には日本作業療法学会でプレゼンもしました。イムス・グループ内の事例検討会でも優秀賞を獲得しています。

あのときの"ちょっといい話"、今まさに進んでいる"新しい取り組み"。
北海道医療大学が、これから未来へ向かう姿を探るために、
本学の歩みを"知る人"、"つくる人"に、お話をうかがっていきます。

職種という枠にとらわれず、その人のためを考えてください。

岡村 英明さん
（看護福祉学部看護学科 4期生）

看護師、診療看護師（NP）。2000年、本学看護福祉学部看護学科を卒業後、愛心メモリアル病院、北光記念病院を経て、2010年からNTT東日本札幌病院勤務。集中治療室（ICU）や心臓外科など、急性期医療の現場を中心に経験を積む。2008年、本学大学院看護学研究科博士前期課程修了。2016年には診療看護師（NP）をめざして再び同大学院へ入学し、2019年、NP養成コース修了。本学看護学科同窓会副会長も務める。

アメリカのNPに憧れて。

卒業して3年目の2003年頃。私は、看護師を続けていくことに悩みを持ちはじめていました。日本の医療制度や慣習によって、看護師の業務に制限があることに疑問を感じていたのです。

憧れていたのは、アメリカのナースプラクティショナー（NP）。州によって制度は異なりますが、診断や薬剤の処方なども行える上級看護師です。患者さんのニーズを把握し、自らがその場で医療を提供する、地域のかかりつけ医のような存在。日本にもそんな制度があったなら。そう思い描きつつ、現実とのギャップに悩んでいました。

その5年後、日本でもNP教育課程がスタート。医療行為に医師の指示が必要なことは基本的に変わらないものの、診療看護師（NP）という日本NP教育大学院協議会による認定資格が誕生しました。医療大の大学院も2010年に道内唯一のNP養成コースを開設。2019年、私は同コースを修了し、診療看護師の資格を取得しました。NPに憧れて約16年。ようやく理想の医療人をめざすスタートラインに立てました。

21の診療部門を擁するNTT東日本札幌病院で、私は診療看護師としての活動を開始したばかりです。大学院で身体診察学や薬理学、病態生理学などをより深く学んだ診療看護師は、いわば看護師と医師の両方の専門性を持つ存在。とはいえ、道内に約20人、当院では初となります。そこで私は、大学院在籍時から、診療看護師とは何か、当院の医療サービスにどのように貢献できるのかを、医師や看護管理者、事務長などと検討。自らの業務に関する規約や、修了後の院内研修に関わる規定を作成し、それに基づいて各診療科をローテーションしています。

卒業旅行は、同期の男子学生9名でバリへ。写真前列右から2番目が岡村さん。男子学生の存在は、かつて看護の道を志すきっかけとなり、今もなお、看護の可能性を模索し続けるモチベーションとなっている。

現在は糖尿病内分泌内科で、主に2つの業務に携わっています。ひとつは、糖尿病がありながら他の科に入院する患者さんに対して、医師とチームを組み、血糖管理などをタイムリーに行うこと。もうひとつは、当院をはじめて受診する外来の患者さんに対して、医療面接や身体診察を実施しアセスメントを行うことです。患者さんの声を聞きながら診断・治療に必要な情報を収集し、医師と共有。よりスムーズに医療サービスを提供できます。また、看護師の視点から、患者さんの社会面・精神面なども把握。患者さんにとっても、医学的知識を深めた看護師がじっくり話を聞いてくれることで、安心して治療に臨めます。そう思っていただける方は想像以上に多く、診療看護師になって良かったと実感しています。

人のつながりと、看護の力。

私はもともと、看護師志望ではありませんでした。文系で首都圏の私立大学を受験しましたが、結局は浪人。その2年目、軌道修正のヒントを探るため、高校時代の友人たちに大学の話を聞きました。中でも気になったのが、医療大の看護です。人間学や社会学も学ぶと聞き、一気に興味深い学問に。医療大の友人は、さらに、男子学生を紹介してくれました。男性でも看護師になれると知り、仲良くなった男子学生は私の先輩に。今でもその交流は続いています。

学生生活で力を入れたのは、サークル活動。看護福祉学部の学生が中心の集まりをつくりたいと思い、キャンプやスキーなどを楽しむサークルを結成しました。当時の仲間は現在、大学教員、訪問看護師、社会福祉法人理事、そして、私と同じ診療看護師などとして全国各地で活躍しています。勉強面では、同期の仲間に救われてばかり。仲間の好意に応え、一緒に合格したいという思いは強く、何とか看護師になりました。

決して真面目な学生ではありませんでしたが、人のつながりという財産を得た4年間でした。現在は、看護学科同窓会の副会長として交流会などを運営。オープンキャンパスにも参加し、高校生の素朴な質問に答えています。積極的に協力するのは、人のつながりが大切だからです。

医療大のつながりがなければ、私は看護師を辞めていたかもしれません。勤務4年目、思うところがあって退職を考えていた頃、スキーで足を骨折し、富良野の病院に入院しました。知り合いのいない環境で、身体を洗うことさえできず、大好きなスポーツも「できなくなっていいや」と自暴自棄に。身体とともに心も汚れていきました。そんな中、札幌からお見舞いに来てくれたのは、男性看護師の仲間たち。私の様子を見て、「岡村、頭が臭いぞ」と洗髪を手伝ってくれたのです。すると、世の中がパッと明るく見えました。洗髪は看護の基本。たったそれだけで、失っていた気力や希望、プライドを取り戻せたのです。そのとき、看護の力をもっと追求しようと決心しました。

怪我を乗り越えた私は、新しい職場でキャリアを再開。看護という学問を深め、後輩へのより良い指導につなげたいという思いから、2008年、医療大の大学院へ。さらに深く看護学を学びました。2016年には、いよいよ診療看護師をめざして2度目の大学院入学。学びたいと思ったとき、応えてくれる環境はいつも母校にありました。

いつも患者さんのそばで。

私にとって医療とは、病気があっても、いかにしあわせに生きていくかを考えること。どれだけ医療が進歩しても、病気はなくなりません。病気を治すだけではなく、患者さんと一緒に、より良い生き方とは何かを考えるのが大切だと思います。

今、医療人に求められることは、より高度で複雑なものとなりました。ひとりの専門職では解決できないことも増えています。チーム医療の必要性が高まる中で、もっとも患者さんのそばにいる看護師は、医療のコーディネーターとしての役割が期待されていると思います。それは、どんな職場でも、業務内容でも同じではないでしょうか。

もっというと、患者さんにとって職種は関係ありません。看護師という枠にとらわれず、そのとき、その人に必要な最善の医療を、タイムリーに提供できることが私の理想。それを追求したひとつの結果が、診療看護師という立場でした。これから、ともに看護の可能性を広げていける仲間が、医療大から現れることを楽しみにしています。

Society 5.0/AI時代に向けた教育支援をめざして

北海道医療大学 情報センター長
薬学部教授
二瓶 裕之

情報センターのめざすところ

教育改革は日本全国の大学で進められ、各大学は大学独自の個性を明確にしながら特色ある教育に真摯に取り組むことが求められています。その中でも、情報通信技術(ICT)は、たいへん有効な道具や、ときとして強い武器にもなるものと、その活用が期待されています。

情報センターは、まさに、ICT活用の活性化を図るための組織であり、現在、運用主任として小田和明薬学部教授、入江一元歯学部教授、濵田淳一看護福祉学部教授、西牧可織心理科学部助教とともに、本学の教育開発・研究、管理運営の支援と効率化をめざしています。

情報センターの特徴

他大学には無い本学情報センターの特徴が、ICTを活用したシステムを独自に開発していることです。全国の大学でも、国家試験対策など様々な目的でICT活用システムが使われていますが、多くの大学では市販のシステムを購入して、その利活用を進めています。この場合、どうしても、システムのやり方に合わせて教育を設計しなければなりません。一方、本学では、情報センター教員、学部専門教員、情報推進課職員が協力して、逆に、本学の教育手法に合わせるようにシステムを独自に作ることとしています。

このような取り組みを支える仕掛けが教育開発です。ここでは、ICT活用システムの開発を教育開発に関わる研究として位置づけし、ICT活用システムによる教育改善効果を検証しながら、その研究成果を広く公開して、さらに、それを情報センターの研究業績として蓄積していくプロセスが作られています。

例えば、教育開発の成果として、本年度は、私立大学情報教育協会の「2019年度ICT利用による教育改善研究発表会」において、西牧助教が発表した研究「クラウド活用による同僚間アンケート調査を取り入れた問題発見課題解決型協働学修」が「私立大学情報教育協会賞」を受賞しました。

この他に、過去にも、私立大学情報教育協会から3回の奨励賞、フジビジネスサンケイアイe-Learning Award2014では学習記録賞を受賞しています。さらに、現在、科学研究費基盤研究(C)や若手研究など3テーマの外部資金も獲得するなど、教育開発に関わる研究活動を活発に行っています。そこで、今回、誌面をお借りして、幾つかの年代ごとに、情報センターが今までにどのような活動をしてきたのか、そして、将来、どのような貢献をしていきたいと考えているのかを紹介させていただくこととなりました。

2000年～インターネット

20年ほど前の2000年頃になりますが、インターネットが急速に広まりつつあるなか、様々な形でICTが教育や研究を支え始めていました。この頃には、主に、学生一人ひとりの知識修得を支援すること、いわゆる、e-Learningによる学修環境の整備をめざしていました。例えば、インターネットの利用を促進するために学内LANなどの情報基盤の整備を進めたり、国家試験対策などのe-Learningシステムの開発など学修環境の整備にも乗り出しました。さらに、中山章薬学部講師などと協力しながら薬学実務実習支援システムも開発し、現在では、北海道大学、北海道科学大学、道内の病院・薬局などで広く利用していただけるようになりました。

また、この頃から、当時の情報センター長小野正利名誉教授(初代)、小田教授(第2代)、千葉逸朗歯学部教授(第3代)、そして、薬学部長和田啓爾薬学部教授、歯科クリニック院長斎藤隆史歯学部教授など多くの先生と共同してICT活用の取り組みを論文として提出し、それらの成果が私立大学情報教育協会などからの受賞へとつながっていました。

2015年～クラウド

次に、大きな転換を呼び起こすきっかけとなったのがクラウド技術の浸透です。クラウドの本質的な特徴は、グループでの共同作業ができることです。例えば、グループでプレゼンテーションファイルを作るとき、今までは1つのパソコンで作業していたのに対し、クラウドでは、複数のパソコンから同時に作業ができるので、グループの全員がクラウド上で意見交換をしながらプレゼンテーションファイルを作るなどの共同作業ができます。このように、クラウドは、e-Learningによる個人の知識修得の支援から、グループ学修の支援へと大きな転換をもたらしてくれました。

本学でも、クラウドを活用するための基盤整備として、情報推進課が中心となってGoogleメールなどG Suite for Educationを導入したり、アクティブラーニングルームとしての情報処理室を構築したりなど、様々な事業を手掛けてきました。このようなクラウドを活用した教育開発の取り組みが、本年度の私立大学情報教育協会からの受賞にもつながりました。

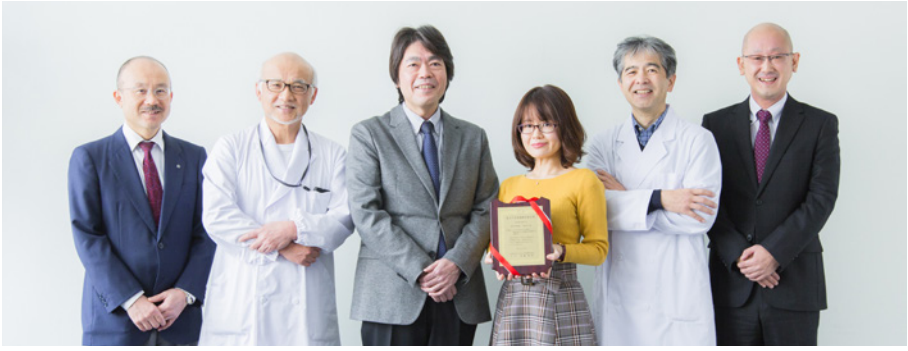
2020年～Society 5.0/AI

今まさに、旋風を巻き起こそうとしているのがAI(人工知能)であり、さらに、社会全体がAIを使いこなすSociety5.0が到来しようとしています。全国の大学においてもSociety5.0に向けた人材育成が喫緊の課題とされています。

大学では、学生の学修活動の過程や成果などの膨大な情報が蓄積されています。今までは、これらの教育ビッグデータを教員が分析して、そこから価値を見い出そうとしていましたが、情報量の膨大さが逆に大きな壁となっていました。Society5.0では、AIがビッグデータの分析を担い、その結果が人へフィードバックされるようになり、今まで見い出せなかったような新しい価値が大学にもたらされようとしています。

しかし、AIは大きな危険性も秘めています。AIの分析結果に目が向きすぎると、AIの指示にまかせっきりになる極端な受け身の行動が広がる可能性があります。重要なのは、AIが導き出した結果の意味を読み解き、それを正しく活用できるデータサイエンス力を醸成することです。つまり、Society 5.0/AI時代を生き抜くことができる人材育成が大学に問われています。

情報センターでは、2020年、AIを活用した教育支援の仕組みを全国の大学に先駆けて開発します。すでに、機械学習やニューラルネットワークによるデータ分析や予測ができるAIの開発は終えています。それに加えて、現在は、単にAIが導き出す分析結果を使うのではなく、利用者のデータサイエンス力の醸成を図りながら教育力向上にAIを生かすことのできる教育開発の仕組みを作ろうとしています。これからも、Society 5.0/AI時代に向けた教育支援をめざして、情報センターではICTを活用した先端的な取り組みを続けたいと思っています。皆様におかれましては、今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。



本学の教員と学生が、アダプテッド・スポーツの普及に携わっています。

近年注目を集める、アダプテッド・スポーツとは?

世界中の感動を呼び、ますます期待が高まっている、パラスポーツ(障がい者スポーツ)。それと同じようで少し違う言葉に、アダプテッド・スポーツがあります。訳すと、“適応させたスポーツ”。人に合わせて、ルールや用具、スポーツ自体を適応させるという、一般的なスポーツとは逆の考え方です。

たとえば、ブラインドサッカーの場合。視力に障がいのある方々もサッカーを楽しめるよう、鈴が入ったボールを使います。さらに、視力を問わず、誰もが平等に参加できるよう、アイマスクの着用がルールとなっています。

つまり、アダプテッド・スポーツとは、障がいのある方々はもちろん、子どもや高齢者、スポーツの苦手な方々まで、すべての人が楽しめるように工夫されたスポーツのことです。

本学の近藤尚也助教が学生ボランティアの場を創出。

看護福祉学部臨床福祉学科の近藤尚也助教は、社会福祉士・介護福祉士としての豊富な臨床経験を持つ、障がい者支援のスペシャリスト。日本アダプテッド体育・スポーツ研究会、北海道アダプテッド・スポーツ研究会などにも所属し、様々な臨床・研究活動を展開しています。さらに、障がい者スポーツ学生ネットワークという団体も立ち上げ、大学や学部学科を越えた学生同士の交流をサポート。近藤助教のもとには、アダプテッド・スポーツの関連イベントにボランティア参加を希望する本学学生が集まっています。

2019年3月17日(日)、西当別コミュニティセンターで開催された「ガチパラ! Vol.11 in 当別」でも、多くの学生が活躍しました。近藤助教が実行委員を務め、本学も後援した同イベントでは、開催当日はもちろん、事前準備の段階から学生が参加。「学生は、各所への後援依頼などにも同行しました。当日のサポートはもちろん、一連のイベント企画や運営の流れを経験することで、福祉専門職として必要な力を身につけてもらうためです」と近藤助教は語ります。

ボランティア参加した学生は、イベント当日もウィルチェアーラグビー、車いすテニス、ボッチャなどのスポーツに触れ、アダプテッド・スポーツや障がいそのものに対する理解を深めました。

「ガチパラ! Vol.11 in 当別」では、本学の学生がボランティアとして参加。写真中央はウィルチェアーラグビー日本代表の池崎大輔選手。

地域住民の方々が実際に競技を体験。上は車いすテニス、下はボッチャの様子。

アダプテッド・スポーツに興味のある学生をサポート。

各種イベントへの参加を通して、アダプテッド・スポーツに対する本学学生の興味・関心は高まっています。中には、自主的な普及活動をスタートさせた学生もいます。

活動開始にあたって、学生から相談を受けた近藤助教は、「ボランティアの募集告知やスポーツ情報などを学生同士で発信・シェアできる環境は、まだ十分とはいえません。そんな中、アダプテッド・スポーツ関連の情報にアクセスできるウェブサイトを開設したいということで、コンテンツ制作などに協力しています」。その活動をサポートする体制づくりを進めていくといいます。

今後も本学は、多くの学生が保健・医療・福祉の実際のフィールドで経験を積めるよう、様々な機会を提供していきます。

臨床福祉学科の近藤尚也助教。重度障がい児・障がい者の身体活動と日常生活および余暇活動の支援を主な研究テーマとして、アダプテッド・スポーツの普及活動に携わっている。

臨床福祉学科の学生がウェブサイト「pepupo」を開設。

看護福祉学部臨床福祉学科2年の菊地莉子さんは、イベントで出会った他大学の学生とともに、アダプテッド・スポーツの普及活動を行うウェブサイト「pepupo(ペプポ)」(https://pepupo.jimdosite.com/)を開設。アダプテッド・スポーツや障がいに対する理解を深めてもらうための活動を行っています。

「pepupo」の告知ポスター。インスタグラムのアカウント(@pepupo2019)でも情報を発信。

「pepupo(ペプポ)」を立ち上げた、臨床福祉学科の菊地莉子さん(写真左)。

インターネットによるご寄附が可能となりました

**学園では、皆様からのご寄附を教育研究活動や施設設備の整備、学生支援ほか学園環境の充実のために活用させていただいています。
このたび、インターネットを通じてパソコンやスマートフォンなどから簡便にご寄附いただける
システムを導入しましたので、引き続き皆様からの温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。**

STEP 1 本学ホームページの「北海道医療大学ポラリス基金」をクリック。

STEP 2 左側の「寄附のお申し込み」をクリック。

インターネットによるお申し込み（クレジットカード・コンビニエンスストア・Pay-easy）

パソコン、スマートフォンなどからアクセスし、煩雑な手続きを経ずご寄附いただけます。
なお、インターネットによるお申し込みは、学園が寄附の決済代行を委託している株式会社エフレジの「F-REGI寄附支払い」を利用したお手続きとなります。

スマートフォンからのご寄付のお申し込みはこちら。
https://kifu.f-regi.com/contribute/hoku_iryo_u

銀行振込によるお申し込み

金融機関ATMやネットバンキング、銀行窓口からご寄附いただけます。
寄附申込書をダウンロードするボタンから寄附申込書を印刷し、必要事項をご記入のうえ、以下のお問い合わせ先まで郵送またはEメールでお送りください。なお、電話連絡いただけましたら、郵送にて寄附申込書をお届けします。

税制上の優遇措置

個人、法人を問わず、寄附者の皆様には寄附金額に応じて寄附金控除を受けることができます。
詳細は、ホームページ左側の「税制上の優遇措置」からご確認ください。

ご寄附に関するお問い合わせ先

北海道医療大学 学術交流推進部

TEL 0133-23-1129　FAX 0133-23-1296　E-mail kyousui@hoku-iryo-u.ac.jp

EDITOR'S NOTE

もうそろそろ、春ですね。雪解けとともに、山菜がおいしい季節。当別キャンパスのすぐ近くにある、かばと製麺の天ぷらが楽しみでなりません。

春を意味する“Spring”の語源は、「湧き出すもの」。泉や原動力という意味もあるそうです。人工物でいっぱいの街中にも、春には生命が湧き出してくるのを感じ、自然の営みの確かさに感動を覚えます。本学でも麗しい袴姿の卒業生を見送った後は、初々しい新入生を迎え入れる季節となります。

「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」。花の美しさと対峙させ、人生の儚さを詠嘆する漢詩ですが、季節などの移ろいや自身の老いといった時流の変化を嘆いてばかりではいけません。むしろ、「唯一生き残るのは、強いものでも賢いものでもなく、変化できるもの」。日進月歩の世の中を生き抜くためには、変化しないものを見極めたうえで、変化していく喜びを知ることが重要と感じます。学生には、医学や医療の基礎知識を固めたうえで、時代による変化や新知識への感受性を高め、柔軟さを身につけて欲しいです。本学の卒業生が、花のように咲き誇る力を持つよう、教員として尽力したいと思います。まずは、うどんと天ぷらを食べてから、具体案を考えることとします。　（Y.T記）

ADVANCE
北海道医療大学広報誌 No.174

STAFF● 遠藤 泰　浜上 尚也　志茂 剛　飯嶋 雅弘　八木 こずえ　白石 淳　真島 理恵　澤田 篤史　児玉 壮志　下村 敦司　近藤 啓　髙橋 祐輔　山形 摩紗　杉谷 昌彦　三川 清輝　小林 伶

発行日● 2020年3月

編集・発行● 北海道医療大学広報部 入試広報課
〒061-0293　北海道石狩郡当別町金沢1757
TEL:0133-22-2113
http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/

広報誌についてのご意見・ご要望・情報等をお待ちしています。
E-mail:nyushi@hoku-iryo-u.ac.jp

■北海道医療大学の教育理念
生命の尊重と個人の尊厳を基本として、保健と医療と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、確かな知識・技術と幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成することによって地域社会ならびに国際社会に貢献することを北海道医療大学の教育理念とする。